

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 11 日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370038

研究課題名(和文) S・フリートレンダーの平和論と教育論に見るカント永遠平和論の可能性と課題

研究課題名(英文) Possibility and challenges of Kant's perpetual peace project viewed from S. Friedlaender's theories of pacifism and education

研究代表者

中村 博雄 (Nakamura, Hiroo)

長野工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：90141887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：S.フリートレンダーの平和論と教育論は、「極性」「創造的無差別」という独自の思想に基づいている。この根本思想を基に改めてカントの永遠平和論を見直すと、その今日的意義と可能性、今後の課題が浮き彫りになる。その具体例が、日本国憲法の基本理念(平和主義〔序文、9条〕と個人としての人格の尊重〔13条〕)とその基本精神に基づく人格教育の実践である。現実(政治、科学技術)と理想(平和、空想)の問題における消極的思考と積極的思考の「極性」は、個人の人格(理性)の「創造的無差別」の働きによって調和できる。この人格主体の教育こそ、今後人類の永遠平和実現の可能性と課題のポイントである。

研究成果の概要(英文)：S. Friedlaender's theories of pacifism and education are based on his unique fundamental thoughts: "polarity" and "creative indifference". If Kant's project of perpetual peace is viewed afresh by these thoughts, its significance today, its possibility and future challenges are revealed clearly. An example of this: the fundamental ideas of The Constitution of Japan (pacifism [preamble and art. 9] and respect for the individual as a person [art. 13] as well as the practice of education towards personality in accordance with the spirit of this constitution. The polarity found between negativism and positivism in the question of realities (politics, scientific technology) and ideals (peace, fantasy) can be harmonized by creative-indifferent operation of the individual person (reason). To bring up and cultivate this personality, is the basic condition so that mankind may realize perpetual peace in the future.

研究分野：人文科学、哲学、倫理学

キーワード：S・フリートレンダー カント 平和 教育 自我 極性 創造的無差別

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景・動機

2005年からドイツでザーロモ・フリートレンダー/ミュノーナ(以下F/Mと略記)全集(*Salomo Friedlaender/Mynona Gesammelte Schriften*, hrsg. von Hartmut Geerken & Detlef Thiel, Herrsching 2005-)全38巻の刊行が始まった。それに前後してF/Mを再評価する研究書・論文が海外で次々と発表され、21世紀に入ってF/M研究の進展がめざましい。本研究は世界的那种な動きの一つであり、日本におけるF/M研究のさきがけとなるものである。本研究の開始当初には主に次の3つの背景・動機があった。

(1) ドイツで刊行中のF/M全集

第2次世界大戦後完全に忘れ去られていたF/Mの作品・資料・文献が全集の刊行によって次々と出版、紹介されている中、私は、国際学会での縁から全集編者 Hartmut Geerken および Detlef Thiel 両氏と密接な協力関係を築くことができた。この機会を生かして、日本においてはもちろん海外においても未踏に近いF/Mの研究分野を開拓し、人類平和の実現のために貢献したいという使命感が本研究開始の第1の動機である。

なお、本研究遂行の陰には、F/Mが世に出ることを願う全集編者の熱い思いがあったことをあえてここに付言しておかねばならない。

(2) 本研究の背景にある国内のF/M研究

F/M全集編者と共編著の形で、2012年、『理性と平和 ザーロモ・フリートレンダー政治理論作品選集』(新典社、2012)を出版した。本書は、日本でこれまで未開拓だったF/M研究に多くの新しい材料を提供した。同書執筆中、全集編者との討議の過程で得られた着想と構想が、本研究開始の第2の動機である。同書のこの題辞「たとえどんなに微かの優位であっても、常に楽観主義に優位を与えよ」が本研究全体の哲学的背景となっている。

(3) 本研究の背景にある国外の文献

全集編者 Detlef Thiel 著 *Massnahmen des Erscheinens* (Nordhausen: Traugott Bauz 2012)。本書は、思想史におけるF/M哲学の位置とF/M研究の今日的意義に対して多くの示唆と確信を与えた。さらに、本研究に着手した直後に出版された Detlef Thiel 著 *Experiment Mensch. Friedlaender/Mynona Brevier, Friedlaender/Mynona Studien Bd.1*, (Wartaweil: waitawhile 2014) が、研究遂行に際して、F/Mの全体像を把握するために有力

な指針となった。

拙著 *Fuer den Frieden* (Nordhausen: Traugott Bauz 2012)。本書は、カントの平和論と教育論を基に、現代の有力な平和論(特に日本国憲法の平和主義)の普遍性をF/M哲学の視座から扱う「日本国憲法論」、ひいては「日本論」で、その最終章(結論部、第4章第3節「永遠平和に向けた努力 §34- §36)が問題提起として本研究の出発点となった。

拙論 *Kants Weg zum ewigen Frieden im 21. Jahrhundert* (*Kantovsky Sbornik*, 4 (46), 2013)。本論は、上記 *Für den Frieden* の問題提起に答えるために、国際学会(本報告書5「学会発表」参照)での口頭発表用に本研究開始直前にまとめられたものである。まとめる過程での考察と同学会での議論が本研究の本格的骨格となった。

2. 研究の目的

(1) 概要

本研究の目的は、「21世紀に入ってドイツで再評価が始まっているF/Mの平和論とその教育論を詳細に検討することによってカント永遠平和論の今日的意義とその可能性、そして今後の課題を明らかにすること」にある。本研究は、2010年度から2012年度まで続けてきた「平和的生存権」及び「平和教育」に関する研究(科研費基盤研究(C)、題目「カント批判哲学による『平和教育』の形而上学的基礎づけ」、課題番号:22520039)の発展である。

(2) 本研究の学術的意義

現在、社会全体が「ぶれない教育」「ぶれない政治」のための確固とした学問的根拠を求めている。そのような中、不運な境遇にもかかわらず激動の20世紀前半を前向きに生き抜き、人間と人間社会のあるべき姿を訴え続けたユダヤ人哲学者フリートレンダーの思想が取り上げられ、再評価される学術的意義は大きい。次の6点の学術的意義が本研究の目的の根底にある。

日本で初めてフリートレンダーの平和論・教育論を正面から取り上げ、その今日的意義を明らかにする。

F/Mが自任する「真のカンティアン」の意味とその根拠を明らかにし、カント哲学の観点からF/Mの平和論およびその教育論の批判哲学的本質を明らかにする。

激動の20世紀前半を生き抜いたユダヤ人

哲学者のカント論を基に、改めてカントの永遠平和論の妥当性と現実社会における実践可能性を検証する。

F/M 哲学を基に改めて現代の平和論、ひいては永遠平和論の問題点と今後の課題を明らかにする。

「真のカンティアン」を自任するフリーレンダーの思想は、カント研究の分野ばかりでなく、デリダ等、他の現代哲学の研究分野に新しい材料を提供できる。

フリーレンダーの幅広い視野と深い洞察をとおして、現代社会がかかえる諸問題の根本的解決方法と今後目指すべき方向性を明確にする。

(3) 本研究の学術的特色・独創性

以上の学術的意義を踏まえると、学術的特色と独創性の観点から、本研究の目的は具体的に次の6点に集約される。

日本ではこれまでドイツ文学研究の分野でしか扱われてこなかったF/Mについて、この思想家の全体像を明らかにし、その平和論・教育論の今日的意義を哲学的に検証する。

ドイツのF/M全集編者との緊密な連携を生かして、これまで入手困難だった文献・資料の収集と整理、分析をおこない、この異色な哲学者の平和論・教育論の哲学的本質、歴史的意義を明らかにする。

「真のカンティアン」を自任し、しかも不遇な亡命生活にもかかわらず激動の時代を前向きに生き抜いたユダヤ人哲学者F/Mの平和論の価値と現代における実践可能性、さらに現代の平和論の課題とその解決策を明らかにする。

特に21世紀に入ってヨーロッパで、また日本でF/Mの再評価が始まった根本的理由を哲学的に解明する。

拙著『カント批判哲学による“個人の尊重”(日本国憲法13条)と“平和主義”(前文)の形而上学的基礎づけ』(成文堂、2008)において、カント研究に基づく独自の日本国憲法論でその有効性を検証した「道徳的目的論」の方法を、異色な思想家F/Mの思想の解明に応用する。

文学、哲学、文化批判、時代批判等々、多岐にわたるF/Mの幅広い視野と深い洞察を貫く根本思想の解明をとおして、現代社会がかかえる諸問題の解決方法と今後目指すべき方向性を明確にする。

3. 研究の方法

ドイツのF/M全集編者の協力によって、遺稿・手紙・日記等を含めたF/Mの膨大な資料の中から重要な関連文献を的確に集めるこ

とが可能となった。また、それらの文献の詳細について全集編者から助言を受け、あるいは全集編者と直接協議することが可能となった。この研究環境を生かして次のように研究を進めた。

(1) 第1段階

基本文献の収集。遺稿・書簡・日記等を含め、膨大な資料の中から本研究の目的に合った適切な文献を厳選、精査した。特にF/M全集第2巻・第3巻『哲学論文および批評1896-1946』・、第6巻『カントと7人の愚者たち』、第7巻・第8巻『グロテスケ作品』・、第11巻『エーリヒ・マリーア・レマルクは本当に生存したか?』等の関係箇所を精査した。全集のそれぞれの作品には編者の解説・注がついているが、編者に直接問い合わせることによって一層詳しい情報を得ることができた。あわせて平和や教育に関する未完の論文・批評・書簡・日記等についても全集編者の支援によって貴重な文献・資料・情報を入手でき、それらを厳選、精査した。

(2) 第2段階

厳選、精査した文献の整理、分析。重要箇所の翻訳。文献の理解・解釈に関して全集編者と協議し、検討を加えた。特に基本文献や重要資料の翻訳に際しては、時代背景や学術的背景を含めて、微妙なニュアンスに至るまで、全集編者と綿密に検討を加えた。同時に、カントの主要文献との照合をおこなった。三批判書はもとより、『永遠平和のために』『人倫の形而上学』『教育学』『一般史考』『理論と実践』等における平和論・教育論関連の記述を再確認しながら、F/Mの平和論と教育論の特徴、独自性、妥当性を検討した。

(3) 第3段階

3年間の研究の総括。予算を次年度に繰り越すことができる制度を利用して、最終年度(2015年度)は、マインツ大学カント研究部からの招待を受けて、F/M全集編者 Detlef Thiel 氏とドイツで直接打合せする機会を設け、次の2方向から本研究の総括をおこなった。

ドイツで直接全集編者と協議できる機会を最大限生かして、文献解釈上の問題点を解決するとともに、重要箇所の時代的・学術的背景を詳細に検討した。

ドイツでの全集編者との直接的協議をとおして、これまで3年間の研究を著書の形にまとめ、総括した(次項「4. 研究成果」(2)(4)(5)参照)。

4. 研究成果

研究成果は、次の(1)(3)(4)(5)の著書（共編・翻訳書）と(2)のドイツ語論文に集約される。以下、〔 〕内の番号は上記2「研究の目的」(3)の項目番号を示している。

(1) 特に上記2「研究の目的」(3)との関連で、ドイツ文学研究者の山本順子教授（愛知県立大学、ドイツ表現主義研究者、F/M研究者）を編者に加え、F/M全集編者 Hrtmut Geerken と Detlef Thiel の4人で著書『技術と空想 ザーロモ・フリートレンダー／ミュノーナ グロテスケ作品選集』（新典社、2014、240頁）を編集し、山本氏と共訳して出版した（中村の執筆・翻訳担当箇所：pp.4-21、27-32、118-234）。〔 〕

(2) 2014年からドイツで刊行が始まっている論文集 *Friedlaender/Mynona Studien*（『フリートレンダー／ミュノーナ研究』）（Detlef Thiel 監修、Wartaweil: waitawhile）の第5巻 *Japanische Reflexe. Beitrage aus Japan*（『日本の反応 日本研究論集』）を編集し、同書掲載の論文“Friedlaender/Mynona und Japan”（『フリートレンダー／ミュノーナと日本』）を執筆した（85ページを担当、2016年12月出版予定）。このドイツ語論文は、上掲書 *Fuer den Frieden* の問題提起を受けて、「日本とは何か？」という根本問題にF/M研究の観点から答えている。〔 〕

(3) 中央大学人文科学研究所の公開研究会（2015年3月4日）で、「F/Mのカント論とカントの永遠平和論」と題して招待講演をおこなった。主催者はフランス文学研究者で、ドイツ文学のみならずフランス文学の専門家にも、F/Mの存在とその研究に関する最新情報は新鮮な材料を提供することとなった。〔 〕

(4) 全集編者 Detlef Thiel 氏との共編著 *Philosophie und Humor*（『哲学とユーモア』）を編集、執筆した。本書は、特に上記2「研究の目的」(3)との関連で Thiel 氏との協議の中で浮かび上がってきた課題「科学技術論・未来論研究を『人間の本質の解明』へと掘り下げる」（科研・2013年度実施状況報告書「12. 今後の研究の推進方策」参照）を受けて構想、編集、執筆されたもので、現在、出版に向けて準備中である。〔 〕

(5) 全集編者 Detlef Thiel 氏との共編著 *Aus der weiten Ferne der Unendlichkeit – neue Blicke auf Japan. Ausgewaehlte Texte von Salomo Friedlaender/Mynona und Paul Scheerbart*（『無限の彼方から、日本への新たな視線 ザーロモ・フリートレンダー／ミュノーナ、パウル・シェールバルト作品選集』）を編集、執筆した。本書は、上記(4)の

共編著執筆の過程で構想、編集、執筆されたもので、20世紀初頭の異色の思想家でF/Mの親友だったパウル・シェールバルトの平和論に基づく日本論である。F/Mとカントの平和論による日本的「和」の本質の解析である。現在、出版に向けて準備中である。〔 〕

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

中村博雄、「カントデー・2013」の報告と「カント&ケーニヒスベルク友の会」の紹介、理想、692、2014、169-172.

Hioo Nakamura, Alexey Salikov（ロシア語翻訳）、Kants Weg zum ewigen Frieden im 21. Jahrhundert, *Kantovsky Sbornik*, 4 (46), 2013, 7-14.

〔学会発表〕(計2件)

中村博雄、フリートレンダー／ミュノーナのカント論とカントの永遠平和論、中央大学人文科学研究所人文科学公開研究会、2015年3月4日。

Hioo Nakamura, Kants Weg zum ewigen Frieden im 21. Jahrhundert, *Kant-Tage 2013*, 2013年4月20日、イマヌエル・カント大学（ロシア連邦カリーモングラード／旧ケーニヒスベルク）

〔図書〕(計2件)

H.ゲールケン、D.ティール、山本順子、中村博雄、新典社、技術と空想 ザーロモ・フリートレンダー／ミュノーナ グロテスケ作品選集、2014、4-8、27-32、118-234.

Detlef Thiel, Hioo Nakamura, Junko Yamamoto, Wartaweil: waitawhile, *Japanische Reflexe. Beitrage aus Japan*, *Fridlaender/Mynona Studien* Bd.5, 2016.

2016年12月までに出版されることが決定している。ページの配分は現在調整中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 博雄 (NAKAMURA, Hioo)
長野工業高等専門学校・一般科・教授
研究者番号：90141887

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし